

イエス・キリストの仲介者性と当事者性

脆弱性の当事者として生きたイエスと、キリスト教社会福祉の原点

佐々木 炎

要旨

イエス・キリストは、神と人間の「仲介者(μεσίτης)」として理解されてきた。しかし本稿ではさらに議論を一步進めて、イエスの仲介者性が、超越的立場からの媒介ではなく、人間の苦悩・悲嘆・脆弱性を自ら引き受けた当事者性に深く根ざしていることを明らかにする。

特に、出自の不安定さ、貧困、難民経験、周縁地域ガリラヤでの生活、病者・罪人への接触という具体的生の履歴を通して、イエスは「脆弱性の当事者」として生きた。本稿は、この当事者性こそが、現代のキリスト教社会福祉実践において決定的な神学的基盤となることを論じる。

I-1. 現実が突きつける問い

神は、愛である¹。

だから神は、誰ひとりとして見捨てない。これがキリスト教信仰の中心であり、神の姿である。しかし、私たちが目を現実に転じれば、その信仰を素直に受け取れない現実が重くのしかかる。たとえば「病」は、ある日突然、望みもしないのに襲ってくる。癒えない病に身も心も削られ、苦しんでいる人がいる。がん、精神疾患、糖尿病、障碍、高血圧性疾患、脳血管疾患、依存症…。

あるいは老いと衰えの中で、役割も誇りも自尊感情も失っていく人がいる。また貧困は、可能性と尊厳を静かに奪う。はたまたこの社会では経済格差が固定化し、「親ガチャ」という言葉が示すように、人生の出発点そのもの

のが制限される。さらには、ひきこもり、登校拒否、孤独は深まり、日本人の約半数が孤立・孤独の只中にあると言われている²。挙げればきりが無いほど、生きづらさを抱え、苦しみに翻弄される日常を過ごしている人が少なくない。私自身もまた、突然の病を診断された。病による身体のしんどさは不規則にやってくる。それだけではない。思うようにならない日々で、心が振り回され、不安に支配されている。福祉の現場に立つ者として、人間の痛みは枚挙にいとまがないと感じる。そして、思わず問わずにいらなくなる。

「神は、どこにいるのだろうか。」

なぜ神は、無限の力をもって、今すぐにも救い出してくれないのか。

I-2. A子さんの人生が示す問い

A子さんは20代の女性である。

彼女は、誰にも知られないまま妊娠し、誰にも語らず10か月を過ごし、孤独のうちに出産した。

彼女は、貧しい母子家庭に生まれた。小学生の時、母親は病に倒れた。生活は急速に立ち行かなくなり、やがて兄弟は、児童養護施設に入所することになった。弟が施設にもっていった荷物は、クリスマスに母親からもらったサッカーボール一つだけだった。A子さん自身も、数枚の衣類しか持たないほどの困窮状態にあった。それほど追い詰められていたにもかかわらず、保護されるまで、この家族に手を差し伸べる者は、ひとりもいなかった。彼女は無力感を学んだ。

高校を卒業後、彼女は施設を出た。未成年の彼女に許される住まいは、住み込みの仕事しかなかった。その後、仕事と住む場所を転々し、21歳の時、ようやくたどり着いたのがネットカフェだった。そこが、彼女の住まいとなった。幼少期から彼女にとって、安心して身を横たえることのできる安住の地は、果たしてあったのだろうか。

貧困で携帯電話すら持てない中で仕事を探すのは至難の業であった。手に職のない彼女にとってお金を得る方法は何があったのだろうか。ネットカフェのパソコンで仕事を探し、そして始めた。それは、他でもない、自分の身体を売ってお金を得ることだった。彼女は、そうやって生き延びた。その生活を3年続けていた、ある日、生理が止まった。

「どうしよう」

その言葉を、彼女は誰にも向けることができなかつた。親も、家族も、友人もいない中で誰にも相談できなかつた。売春によって、身知らぬ異性との間に宿った命だと、誰に語れるだろうか。語れば、どれだけ社会や他者に叱責され、罵られ、排除されるか。彼女には、そんな未来しか想像できなかつた。沈黙だけが、唯一の選択であった。

彼女は何度も、胎内の命と一緒に自死を考えた。それでも、胎内のいのちの鼓動が、彼女の思いを踏みとどまらせた。そして、誰にも祝福されることのないまま、孤独の中で陣痛が来た。彼女は駅で救急車を呼び、出産した。出産後、こどもは養子となった。彼女は保護され、私たちのシェアハウスに来た。

彼女が生まれ、そして「孤立出産」に至る人生は、本人の弱さや怠惰によって生まれたものだろうか。否、と私は声を大にして言いたい。問題は、本人ではない。苦しみを抱えたままでは生きられない社会に問題があるのではないか。社会の側がつくり出している制度の穴、社会システムの不備、関係の歪み、孤独を生む仕組み、貧困を恥とする文化等が

すべて、彼女を追い詰めた。支えるはずの社会の土台が崩れていたのだⁱⁱⁱ。だから、責めるべきは彼女ではない。問い直すべきは社会の構造である。そして、社会を構成する私たちと、私という一人称の在り方だ。そして私は、流浪のAさんを前に深く問わずにはいらなかつた。

「神は、どこにいたのか。」

I-3. 不確かな時代と、共に苦しむ神

現代社会は「VUCA (ブーカ)^{iv}」と呼ばれる。

変動性 (Volatility): 変化が激しい

不確実性 (Uncertainty): 先が見えない

複雑性 (Complexity): 問題が絡み合っている

曖昧性 (Ambiguity): 正解がはっきりしない

この予測困難な時代にあつて、A子さんだけでなく、私たちの誰もが、生きづらさを抱えながら生きなければならぬ時代である。

だからこそ人は、「強く」「確かな」神の存在を求める。揺らぐ、圧倒的な神を欲する。しかし、イエスの示した神は、本当にそのような「強い神」だったのだろうか。私は、そうではないと感じる。イエスが示した神は、「脆弱 (vulnerable)」な神であった。脆く、傷つきやすく、貧しい側に立つ神である。それは神学の用語としては、「神の謙遜」とも言われ、神が自らを低くし、イエスを通して、人間への愛と救いを示す極限の行為を指すと説明する (フィリピ2章)。イエスはまさに、そのように生きた。

VUCAの時代に生きる今、私たちが改めて希望を取り戻すために必要なのは、この「脆弱性」を引き受けたイエスの神理解ではないだろうか。

人は、自分の力だけでは神を知ることができない。

だからこそ神は、人間が神を見つけられるのを待つのではなく、神自身の側から、その存在と意思を人間に向けて示された。この神

自身による自己開示を「啓示 (αποκάλυψις / アポカリュプシス)」という。

神は、イエスを通して自身を明らかにされた。「神のことば」であるイエスは、誰も見たことのない神を、説明によってではなく、生き方そのものによって示された。イエスは、神の愛を語っただけではない。神の愛そのものとして、人間の歴史の只中を生きたのである。

聖書は証言する。

「その名はインマヌエルと呼ばれる。これは『神は私たちと共におられる』という意味である」(マタイによる福音書 1 章)。

イエスは、「インマヌエル (神は私たちと共におられる)」という真理を、抽象概念で教えたのではない。ひとりの人として生まれ、苦しみ、傷つき、そして死に至るといふ、その具体的な生の全体をもって示されたのである。聖書は繰り返しそう証言している。イエスが人間の苦しみを一時的に理解しているということではない。人間の苦しみのただ中に身を置かれ、味わい尽くした出来事である。

だからイエスは、A子さんの生まれた時から、誰にも語れなかった沈黙の10か月の間も、そして今も、これからも、苦しみを共にしておられる。イエスは、私たちを含め、すべての人の苦難のただ中に留まり続ける。孤独の只中を、傷みのその場所から立ち去らない。共にあり続ける。そして、それを眺めているのではない。自らの苦難として引き受ける方なのである。

脆弱性を生きたイエスと、脆弱を抱えた私たちが「共にある」この関係は、イエスが語った「くびき」(マタイ 11 章)に重なる。重荷を負う者と歩調を合わせ、重荷を共に同伴し続ける方である。その関係の中で、漆黒の闇に差し込む一筋の光が見えてくる。イエスは、この「共におられる神 (インマヌエルの神)」を言葉によってではなく、生をもって語り続

けている。それは、周縁への宣教を、より効果的にすすめるためではない。神の国は周縁から始まり、その人々から広がるためである。

この神理解は、イエスの生涯において、具体的な関わりとして結実していった。

以下では、その関わりが、どのように社会の周縁に置かれた人々へと向けられていったのかを確認したい。

II-1. 社会の周縁に立ち続けたイエスの かかわり

聖書は一貫して、イエスが社会で疎外され、見えなくされ、しばしば「棄民」^vとされた人たちの側に立ち続けたことを証言している。その関わりは、一時的な支援にとどまらなかった。一人ひとりの人生の深層まで届き、全人的な回復^wを成した関わりであった。

第一に、イエスは貧困のただ中に置かれた人たちと深く関わった。

「貧しい人・日雇い労働者」(マタイ 20 章)、「貧しい配偶者を亡くし独身の者」(ルカ 21:1-4)と深く関わった。当時の社会では、貧しさは怠惰や努力不足、あるいは神に祝福されていない証拠と見なされ、軽蔑の対象であった。しかしイエスは、そうした価値判断そのものを否定し、貧しさの有無によって、人の尊厳が左右されることがないことを、その関わりを通して示した。

第二に、人として数えられなかった存在だった女性たちに積極的に関わった。サマリヤの女性 (ヨハネ 4 章)、12年間出血の止まらなかった女性 (マルコ 5 章)、姦淫の女性 (ヨハネ 8 章)、マルタとマリア (ルカ 10 章)。女性が公的な主体者として認められなかった社会にあって、イエスは、性別によって人を分け隔てることなく、一人ひとりを対等な人格として接し、その人の幸せを願って関わった。

第三に、罪人や宗教的に不浄とされた人々

ちとも関わった。取税人ザアカイ（ルカ19章）、取税人レビ（マルコ2章）、遊女とされた女性（ルカ7章）、彼らは宗教的に「正しい」とされる人々から排除されていた。しかしイエスは、誰をも等しく愛し慈しみ関係を築いた。

第四に、民族・宗教の違いによって排除されていた人たちとも関わった。良きサマリア人（ルカ10章）、サマリア人の女性（ヨハネ4章）、百人隊長（マタイ8章）。彼らは神の民ではないとされていた存在である。イエスは、特定の集団だけに帰属するのではなく、すべての人を隣人として迎え入れた。

第五に、子どもたちと関わった。当時の子どもは、未熟で、労働力にもならない価値のない存在と見られていた。5千人の給食では、女性と子どもは数に入れられていなかった（マルコ6章）。しかしイエスは、「このような者の一人を受け入れることは、わたしを受け入れることだ」と語り、子どもたちを祝福した（マルコ10章）。イエスは、数にはならない存在を決して見落とさなかった。

第六に、母子家庭・やもめたちへも関わった。家父長社会では、夫を失うことは、生活・尊厳・未来を同時に失うことを意味していた。イエスは、ナインのやもめ（ルカ7章）、貧しいやもめの献金（ルカ21章）に目を留めた。社会の中で苦しんでいる者に目を留め関わった。

第七に、「病気」「障害」を「罪の結果」とみなされていた人たちと関わった。重い皮膚病の人（1章）、38年病気で伏していた人（ヨハネ5章）、目の見えない人（ヨハネ9章）、中風の人（マルコ2章）と向き合って癒した。イエスは、手の萎えた人に向かって、「真ん中に立ちなさい」と言われた（マルコ3章）。それは単なる治療だけではなく、社会の周縁に追いやられていた人を、社会の「真ん中（中心）」へと回復させる宣言であった。当時、病や障碍は「汚れている」「神に裁かれ

ている」と理解され、「近づいてはいけない」とされていた。人々は彼らを社会の外に追いやった。そのような現実の中で、イエスはまず、「立ちなさい」と招いた。それは、「あなたは、社会の片隅で身を屈めて生きる存在ではない。社会の真ん中で生きて良い存在なのだ」というメッセージであった。

その象徴的な出来事が、重い皮膚病を患っていた人との出会いである。

「重い皮膚病を患っている人が、イエスのところに来てひざまずいて願い」出て癒して欲しいと願い出た人がいた。（マルコ1章）

当時、「重い皮膚病（ツァラアト）」と呼ばれた病は、現代医学のハンセン病だけでなく、さまざまな皮膚疾患を含む概念であった^{vi}。皮膚疾患は、感染する問題だけではなく、宗教的な理由で、社会から隔離され、存在そのものを否定されていた。そこには、誰も触れない孤独があった。そこに存在しながら、存在しない者として扱われる毎日があった。

イエスはその人に近づき、語りかけた。

『よろしい(θέλω/テロ). 清くなれ(καθαρίσθητι/カタリストイ)』

「よろしい(θέλω/テロ)とは、「私はそうしたい」「それを望む」「心から願う」という意味である。そしてイエスは、言葉だけで終わらなかった。

「イエスは、手を差し伸べてその人に触れた」（マルコによる福音書1章40節）

イエスは、自ら進んで触れた。触れなければならない強い意思をもって触れた。イエスが触れたのは、病の中にある身体だけではなかった。何年も誰からも触れられなかった「孤独」に触れたのである。また社会から排除された「痛み」に触れたのである。そして、神から見捨てられたという「絶望」に、魂に触れたのである。

なぜイエスは、危険を冒してまでも、この

「触れる」行為を、あえて行ったのだろうか。聖書は記す。

「イエスは深く憐れんだ」。

この「深く憐れむ」とは、単にかわいそうという意味ではない。ここで使われているギリシア語は「σπλαγγνίζομαι (スプランクニゾマイ)」である。その名詞形 σπλάγγνα (スプランクナ) は、「はらわた」「内臓」「腸」「心臓の奥」を意味する。イエスは、排除され、見捨てられた人々を見て、はらわたが引き裂かれるほどに痛んだ。内臓の奥底が震え動かされるほど、自らのこととして深く傷んだ。ここにイエスの愛の本質がある。

II-2. 探し続ける愛

この愛は、例外的な奇跡として現れたものではない。

イエスは、百匹の羊のうち一匹が迷い出た譬え話を語った(ルカ15章)。羊飼いは、その一匹を見つけるまで探し続ける。そこでは、羊の能力も責任も問わなかった。失われた一匹を前に、羊飼いは自らの命を顧みず探し続ける。この行為の根底に「σπλαγγνίζομαι (スプランクニゾマイ)」がある。見失うこと自体が、「はらわたが引き裂かれるほどの痛み」なのだ。

イエスの働きとは、社会の周縁に追いやられた人を、自らも同じように痛みを担いながら、再び一人の人としての回復する営みであった。そこに信仰の中心があり、同時に、福祉の原点がある。

イエスは今も、社会の片隅で生きづらさを抱えるあの人も、この人も、そして私自身を含め、すべての人をも「はらわたが引き裂かれるほどの痛み」をもって探し続けている。

確かに、それは「神だからできた」と言うこともできるだろう。イエスは父なる神と同一の「神の性質」をもっていった。しかし、それだけでこの愛を説明し尽くすことができるだろうか。

むしろ、イエスが生きて示した「共に痛み、共に耐える愛」は、「神だからできた(神性)」という側面と同時に、周縁の地ガリラヤで育ち、抑圧と貧しさを生き抜いてきたイエス自身の「人性」、すなわち脆弱性の当事者としての生にも深く根差していたと理解すべきではないだろうか。

III-1. 自己一致(コンルエンス)としてのイエス

イエスの地上の生涯は33年であり、公に活動したのはわずか3年に過ぎない。では、残りの30年は無意味だったのか。否、むしろその30年こそが、イエスの宣教を根底から支える不可欠な土台であった。

イエスは、苦しむ人に出会ったとき、決して立ち去ることも、見捨てることも、黙過することもなかった。必ず足を止め、「はらわたが痛む」コンパッション(Compassion)をもって関わった。心理学でいえば、それは「共感的理解(empathy)」である。

またイエスは、人を病や障碍、貧困、罪という属性によって分断し、切り捨てなかった。これは心理学でいう「無条件の肯定的尊重(unconditional positive regard)」にほかならない。その結果、イエスにおいては、語ることで生きることが決して分裂していなかった。内面で感じている動機と、語る言葉、そして外に現れる行動やケアが、常に一致していたのである。この一貫性は、心理学では「自己一致(congruence)」と呼ばれる。

イエスの宣教が人々の魂に深く届いた理由は、語りの巧みさや奇跡の力だけではない。その存在そのものが、語る内容と完全に一致し、貫かれていたからである。

心理学者C.R. ロジャーズは、対人援助が成立するための条件として、「共感的理解」「無条件の肯定的尊重」「自己一致」という三条件を提示した⁴⁾。これらは本来、援助者に求められる態度であるが、イエスの生を振り返

ると、この三条件が完全な形で体现されていた存在が、まさにイエスであったことに気づかされる。

イエスは語ったことを生き、生きることによって語る言葉に力を与えた。「神の子」であると同時に「人の子」¹⁶であった所以が、ここにある。この一致は、一朝一夕に形成されたものではない。3年間の公生涯は、30年間にわたる人間としての経験に裏打ちされていた。イエスは、苦難と脆弱性の只中を生き抜く中で、一貫した行動傾向としてのパーソナリティを成熟させていった。神性を保持したまま、人性を軽視するのではなく、むしろ人性を徹底的に成熟させ続けたのである。

心理学者の波多野完治は、次のように述べている。

「人は人生の体験や経験から無償で学ぶことが生まれつきの「無条件の反射」である」

人は、生きるそのものを通して、辛苦や悲哀を通して学び続ける存在である。人生全体が「生涯教育」なのである¹⁷。

この視点に立つならば、イエスの生涯もまた、人生の悲哀の只中から「人性」を成熟させていく歩みの連続であったと理解できる。

こうしてみると、イエスの宣教の力は、超越的な神性だけに由来するのではない。脆弱さを引き受け、人として生き抜いた経験に深く根ざしている。成熟した人性と神性が分裂することなく、一致したところに、イエスの言葉と行為の信頼性が生まれた。

そこにこそ、神学的にも、心理学的にも、そして福祉実践においても、今日なお問い続けるべき重要な示唆がある。

III-2. イエスの当事者性

では、その一致した人性と神性は、イエスのどの様な「生の具体」に根ざしていったのだろうか。

①「出自」を引き受けた救い主

イエスは、社会的には「婚外子」という立場で生を受けた。出自という、一生涯消えることのない、選び直すことのできない条件を、最初から最後まで引き受けた方である。出自は、生まれた瞬間から死に至るまで拭い去ることができないものである。そして、存在そのものに絡みつき、離れることができずに纏わりつく。イエスは、その重さと痛みを生涯抱え続ける当事者として生きる道を選んだ。

したがって、イエスは最初から最後まで、苦しみを共に生き抜く真実の同伴者であると言い切ることができる。イエスの誕生は、不安定な状況にある者こそ、神から遠い存在ではないことを示す。むしろ、神が最初に来られた場所である。イエスが、貧しい人、病む人、排除された人に近づいたのは、使命と同時に、誕生から始まる自身の生の経験に根差していた。そして、生後まもなく、両親と共にエジプトへ逃れる難民となったこととつながる。住み慣れた土地を追われ、言葉も文化も異なる地で生き延び、飢え、恐怖、先の見えない不安、イエスはそれらを、身をもって経験をした。

イエスは、先の見えない場所へ、不安が勝り、重苦しさが続く場所へ、心折れそうになるその場所へ、そして、誰も踏み入ることのできない魂の最も深いその場所へ来られる。イエスの出自は、神がまさにそこに来られたことを、静かに、しかし確かに語っている。

不安に押しつぶされそうなマリアへ、天使は語った。

「インマヌエル／神は私たちと共におられる」。

あなたは一人ではない、私はそこにいるという宣言であった。

「私はあなたを決して置き去りにしない。そのただ中に行く。共に泣き、共に立ち、共に歩く。」「Nobody Left Behind」、誰一人置き

去りにしない、誰一人、見捨てない。それが、イエスの出自が物語る神の真実の姿である。

②貧困の「テクトン」として生きたイエス

イエスは「テクトン (τέκτων)」として生活をした。それは現代的な意味での「大工」ではなく、家を建てる職人全般を指す。石を切り、整える(石工)、木材を加工する(木工)、建物や修繕などを含む、肉体労働全般を担う仕事であった。収入が安定しない労働であり、仕事がなければその日の糧も得られない。病気や怪我はすぐに、生活が崩れる労働であった。テクトンとは、常に不安定な生活を抱える社会的位置であった。

イエスがこの仕事に就いたのは、父ヨハネの職を継いだというだけではなかった。出自のために就ける職業は限られていた。支配層でも宗教指導層でもなく、誇れる身分や社会的資本を持たなかった。貧困のゆえに、当時の支配層が受けるような十分な教育の機会にも恵まれなかったと推察される(ヨハネ福音書7章参照)だからイエスの譬えには、「家を建てる」「土台・礎」「石・隅の親石」「壊す・建て直す」といった、テクトンの身体感覚に根ざした表現が数多く登場する。

イエスは、テクトンとして、明日の見えない人々のただ中に自らを置いた。

「明日のことを思い悩むな」

このイエスの言葉は、余裕のある指導者から語られた言葉ではない。明日の保証を持たない不安定な労働を生きた当事者の言葉である。私たちと同じ地平に立ち、同じ不安を引き受けたイエスの言葉であるからこそ、この言葉は今も、先の見えない私たちに届く。

詩編は語る。

「弱い人を塵の中から起こし／貧しい人を芥の中から高く上げる」(詩編 113 編)

イエスは、低きところに身を置き、貧しさ
と不安定さを生きることによって、その真実

を身体化した方である。

③家父長制の中で育ったイエス

当時のユダヤ社会は、強固な家父長制が色濃くあった。社会の中心は成人男性であり、女性や子どもは人の数に入らず、教育を受けることができなかった。家の「所有物」に近い存在であった。福音書で「男が五千人いた(ほかに女と子どもがいた)」とわざわざ書かれるのは、その構造を物語っている。女性と子どもは、周縁に追いやられ、社会的存在として認識されにくい立場にあった。

そのような中で、イエスは女性に話しかけ、対話し、憐みではなく同じ一人の人として関わった。特に、「やもめ(夫を失う)」「離縁された女性」「母子家庭」はほぼ貧困状態に追いやられていた。宗教的にも「神に祝福されていない家庭」と見なされ、社会的な視線は冷酷であった。

イエス自身、母子家庭であった可能性は極めて高い。イエスの誕生物語には、父ヨセフが描かれているが、公生涯が始まるころから一切登場しない。時期は分からないが、イエスは母子家庭として生きた。マリアとイエスは、生存の危機にあり、生活の厳しい中で、常に周縁に置かれる経験を重ねた。だからイエスは、福音書で繰り返し、「やもめ」「孤児」「貧しい人」を招いた。社会構造の中で最も脆弱な立場に置かれた人々を、誰よりも具体的に知っていたからである。

イエスは言う。

「(私は)あなたがたを捨てて、決して孤児にはしません」(ヨハネ福音書)

これは、神の想いだけではない。自らが通ってきた道からしか語れない、身を賭けた言葉であった。イエスは、今日もなお、家族の形やジェンダー不平等、貧困と排除に苦しむ人々の現実に、深く接続し続けている。

④周縁の地ガリラヤに生きたイエス

イエスはガリラヤ地方のナザレという村で育ち、30歳までそこで暮らした。生涯33年のうち、その大半は、ガリラヤで生活していた。

「ガリラヤ」という名は、ヘブライ語の「ガリーール（周辺）」を意味し、エルサレムを中心とした宗教や政治の中心から見れば、ガリラヤは周縁の地であった。また、さらに当時、ローマ帝国の植民地支配の下に置かれ、過酷な重税と経済的搾取にさらされていた。人々は尊厳を踏みにじられ、飢えに苦しむ生活を余儀なくされていた。

使徒信条にそのことは書かれている。

「ポンテオ・ピラトのもとで苦しみを受け」

この短い一文の背後には、幾重にも重なる構造的苦しみがあつた。

「ナザレから、何か良いものが出るだろうか」（ヨハネ1:46）と言われるように見下され、期待されていない場所であった。歴史的記録にもほとんど残らない小さな村で、異邦人が多く、信仰の浅い人たちがいる場所として軽視された。しかしイエスは、宗教と政治の中心ではなく、このガリラヤという周縁の地で育ち、周縁の人々のただ中で人生の大半を過ごした。そしてイエスは、そのガリラヤで宣言した。

「時は満ち、神の国は近づいた。」

神の国は、中心から周縁へと徐々に「届けられた」のではない。最初から、周縁において、まず最初に告げ知らされたのである。

復活の後、天使は弟子たちに告げた。

「あの方は、あなたがたより先にガリラヤへ行かれる。」（マルコによる福音書16章）

復活の主が弟子たちを待った場所は、栄光の都エルサレムではなかった。再び、ガリラヤであった。

イエスはいつの時代においても社会の周縁に立っている。成功者や社会の中心に安住する側にいるのではない。また、教会の建物の

中にだけ留まる方ではない。むしろイエスは、教会とは無縁と思われてきたその場所に、社会から零れ落ちた人が蹲るその場所に、切り捨てられたような漆黒の場所に、その人の傍らに立つ方である。私は、そのような場所を「ガリラヤ」と呼びたい。

ガリラヤは、もはや過去の地名ではない。社会の中心から外され、「価値がない」と思い込まされてきた人が生きる場、私たち一人ひとりが生きる現在が、今日のガリラヤである。だからこそ、私たちの人生の「周縁」もまた、切り捨てられた場所ではない。そこは、イエスが共にいる場所であり、意味が回収される場所なのである。ガリラヤとは、神が先に立ち、招き、待っておられる場所の名なのである。

⑤弟子の選び

イエスが選んだ弟子たちは、当時の宗教的・社会的基準から見れば、明らかに「ふさわしくない人々」であった。漁師、徴税人、熱心党関係者。いずれも、宗教指導者でも、教育を受けたエリートでもない。むしろ、貧困層、被支配層の人々であった。

イエスが彼らを弟子として招いたのは、単なる人材不足の結果ではない。それは明確なイエスの意思である。イエスは、能力や社会的評価を基準に人を選ばなかった。無学で、脆弱さを抱え、周縁を生きてきた当事者たちと共に、神の国を生きる共同体を形づくったのである。イエスは弟子たちを、「救うべき無力な存在」として一方的に扱わなかった。社会の周縁、底辺に置かれてきた彼らのただ中から、「神の国」を始められたのである。

聖書はそのことを証言している。

「世の愚かな者を選び、世の弱い者を選ばれました。また、世の取るに足りない者や軽んじられている者を選ばれました。」（第一コリント1章）

イエスは今日もまた、非力な私たちを、そ

して支援を受ける側に置かれた福祉の当事者たちと共に、神の国の「共同体」を創り続けている。周縁から始めること、それこそが、弟子たちの共同体に示されたイエスの「真実(πίστις／ピスティス)」が体现されている。

Ⅲ-3. 回収されなかった人生と、私自身の問い

A子さんの人生に触れたとき、私はどうしても、自分自身の人生を問い返さずにはいらなかった。Aさんの語った「回収されなかった人生」は、決して他人事ではなかった。それは、私自身が長い時間をかけて抱え続け、人生に大きな影を落としてきた「回収しきれない人生²⁴」と、痛むほど深く重なっていたからである。

私は「婚外子」として生まれた。

父は幼少期、「人減らし」のために養子に出された。養子先では兄弟の子守をさせられ、学校に通うことが許されなかった。実母から十分な愛を受け取ることができないまま、深い孤独感を抱えたまま成長した父であった。無学であった父は15歳で職に就き、駅の掃除夫であった。朝から晩まで、臭いトイレを、這いつくばるように掃除し続けた。

40代で精神疾患を発症し、父は精神科病院に入院した。その病院に、当時19歳であった、後に私の母となる女性がボランティアとして関わっていた。父は女性の助けを得て病院を抜け出し、妻子ある身のまま逃避行を続けた。逃げ回る日々の中で、父が55歳、母が27歳という年齢差28歳で、私は宿された。婚姻関係のない妊娠。社会的に許されない関係。祝福ではなく、非難の眼差しでの妊娠であった。

母は、産まれてくる子どもを産み育てられるのか、不安と恐怖で揺れていた。決断ができないまま日々は過ぎ、生活は一段と困窮した。二人は金銭も尽き、食べることもままな

らなくなった。

「もうだめだ。お腹の子どもと三人で、人生を終わらせよう」

そう語り、死に場所を探して彷徨っていたとき、見ず知らずの一人の人が声をかけた。

「お茶でも飲んでいきませんか」

条件も理由もない、その一言が、私たちを生き延びさせた。その方の家の一間を借り、しばらく身を寄せ過ごした。

私は、「婚外子」として生まれた。誰も祝ってくれる人がいない中で生を受けた。言葉では尽くせないほどの差別と偏見の中で育った。やがて私たち家族は、村八分にされ、人里離れた場所で生きることを強いられた。社会の周縁で生きることを強いられ、誰とも交わることなく生きる日々だった。

住まいは、電気も、水道も、風呂もない小屋だった。隙間風が吹き込み、身体だけではなく、心まで寒かった。父は精神疾患と老いのため、働くことができず、家計は母のわずかな収入だけだった。生活は常にひっ迫し、貧困に喘いだ。

精神疾患を抱えた父の言動は、幼い私には理解ができなく、家庭は安心できる場所ではなかった。ときに、暴力などの虐待もあった。学校では勉強についていけず、家にも学校にも居場所がなかった。私は次第に家に帰らず、ゲームセンターに入り浸るようになった。高校二年生の頃には、不良グループのリーダーになった。卒業後も、仕事は長続きせず、社会や他者に反発しながら、生きる意味も分からないまま彷徨い続けていた。

社会から貼られたレッテルは、やがて私自身の内側に刻み込まれていった。「婚外子」「価値のない存在」「おかしい家族」。それらの言葉は、外部からの評価にとどまらず、いつしか自己理解そのものとなり、私自身になっていった。

「俺なんか、生まれなかつたら良かった」

この思いは、単なる一時的な感情ではなかった。存在全体を覆う自己否定として、深く根を下ろしていた。不甲斐ない自分への嫌悪と情けなさ、そして、寄る辺ない孤独に包まれ、心は震えた。その度に、暗い夜道を、爆音を立てて走り続けた。自分自身を受け止めることができなかった。もしこれが人生のすべてであるならば……、そう思うたび、胸が締め付けられ、涙が止まらなかった。

A子さんの人生に触れたとき、私が覚えた痛みは、まさにこの地点で私自身と交差していた。A子さんの「回収されなかった人生」は、私自身の「回収しきれない人生」と深く共鳴し、重なっていたのである。

Ⅲ-4. ガリラヤのイエスを想う

私は、報われない時間を幾度も生きた。孤独をかみしめるしかなかった日々があり、やり場のない怒りを抱えた夜も数えきれない。差別があり、抑圧、排除、無関心、暴力の不正義があった。自由も、平等も、共生もない実現の記憶も、決して少なくない。それらは誰とも分かち合われることなく、置き場のないまま、人生の奥底に静かに堆積していった。条件を付けることもなく、この人生をそのままで引き受け、最後まで共に背負い続けてくれる存在はいないのだろうか。私は、ずっとその問いを抱えて生きてきた。

「誰が、このどうしようもない人生を回収してくれるのだろうか」

この問いは、孤独の中で出産したA子さんだけではない。多くの福祉利用者、そして自らの人生を振り返るすべての人の胸に、怒りと嘆きを伴って立ち現れる問いである。

「どうして…」

人は、消すことのでない悔いを抱え、怒り

と悲しみの中で揺れ続けている。社会の不正義や構造に苦しむ。支援者である私たちもまた、その人生の前に立ち尽くし、無力感の中で問い続ける。

この人生を、余すところなく受け止め、台点のいく形で「回収」をしてくれる存在はいないのだろうか。私は、その問いにこう答えたい。

「ガリラヤのイエス」にある、と。

イエスは、婚姻前の妊娠による社会的スキャンダルの只中に生まれ、貧困と不安の中で育ち、生涯にわたり社会の周縁を生き続けた方であった。私たちと同じように、抱えきれないほどの不全感を抱えながら、ガリラヤの地で30年という歳月をかけて、人として悩み、傷つき、生き抜かれた。そして十字架の上で、裸の脆弱な存在として叫ばれた。

「わが神、わが神、どうして」

この叫びは、イエスの痛みの全生涯が凝縮された、周縁者として蠢いた叫びである。この叫びに私たち一人ひとりの人生を重ねるとき、A子さんの人生も、私自身の人生も、そして報われないまま悔いを抱えて亡くなったあの人の人生も、すでにイエスによって「回収されている」と呼びたい衝動に駆られる。

『疲れた者、重荷を負う者は、だれでも私のもとに来なさい。休ませてあげよう。』（マタイによる福音書11章28節）

私たちはそれぞれ「人生の束」を背負っている。哀れさ、憂い、苦しみ、怒り、恥、葛藤、失敗、あきらめ、そして漆黒の絶望。イエスは、その涙するしかなかった重荷を抱えた私たちを招いている。そのすべての汚泥を共に味わい尽くし、背負い、苦闘する同伴者として、イエスは今も一人ひとりの人生のただ中に立ち続けている。そこにのみ、全人類の希望は生まれる。

イエスが王宮ではなくガリラヤを選び、十字架の死に至るまで生き抜かれたのは、この絶望と希望を分かち合い、連帯するためであった。まさに「インマヌエル(共にいる神)」である。

私は、キリストに出会い40年の歳月を生きてきた。しかし、私自身の傷は完全に癒えたわけではない。機能不全家族の影響、愛着の困難に由来する生きづらさ、人間関係の不安は、今も私の内に残っている。それでも、悲嘆に暮れる誰かの隣に立とうとすると、この「傷つきやすさ」は疼き出す。そしてその疼きが、相手の苦しみに触れる感受性となる。「世界に一人しかいない、あなたの苦しみをそのまま受け入れよう」そう促される神の受信態となる。

こうして私の人生は、今も「回収される途上」にある。そして回収されつつある人生は、他者を癒す力へと、静かに、しかし確かに変えられていく。

私たちの「どうして」という問いは、ガリラヤのイエスによって、根底から書き換えられていく。イエスによる「訂正的情緒経験²⁴」は、歪められた自己理解を癒し、存在そのものを、再び創り直すのである。

IV-1. 今日のガリラヤを生きる一人の男性とイエスのまなざし

今日、「ガリラヤ」を生きる一人の男性がいる。

B男さんは60代である。2024年の冬、彼はコンビニでおにぎりを一つ盗み、拘留された。

聖書は明確に教える。「盗んではならない」

彼は1990年代、日系三世として南米から来日した。しかし、生まれは南米でも、彼は「異国の血を引く者」だった。どこにいても、完全に迎え入れられる場所はなかった。そん

な彼は30代で来日し、工場で働き始めた。しかし日本でも、彼はやはり「外国人」であり続けた。言葉の壁、文化の違いで、差別やいじめを受けた。深い孤独を感じたが、それでも彼は遠い祖国の家族へ仕送りを続けた。結婚することもなく、弱音を吐くことも甘えることもなく、生きてきた。2024年9月末、彼は突然解雇された。住み込みであった寮も同時に失った。仕事と住まいは一瞬で消えた。60代を超えた外国籍労働者を雇うところは、どこにもなかった。家族は遠い国におり、日本で頼る人もいなかった。

彼はネットカフェに身を寄せた。足を伸ばせるのは、一畳ほどの空間だけだった。この広い世界で、自分の身を横たえることを許された仮の場所が、何と小さいことかと感じたという。カバンの中には、着替えが数枚しかなかった。30年近く、がむしゃらに働いた日々は何だったのか。怒りと虚しさが胸を締め付けた。仕事を探したが見つからず、助けを求めて訪ねた先でも、手を差し伸べてくれる人はいなかった。やがて所持金が尽きた。冬であった。彼は路上で眠った。寒さに震え、飢えに耐えた。遠い祖国を思い出し、声を押し殺して泣いた。公園の水を飲み、空腹を我慢した。

三日目、もう飢えに耐えられなかった。彼は無銭でコンビニに入った。お弁当棚の前で10分間、立ち尽くした。何を思ったのだろうか。彼は、おにぎりを一つ、そっと手に取り、店を出た。そして、逮捕された。留置場の部屋は寒くなかった。やっと三日ぶりに生きた心地がしたという。飢えが止まり、震えが止まり、ようやく、生きることができた。

その後、B男さんは、私たちの団体が運営する、刑に服した人が再び社会で生きることを支援する「自立準備ホーム」に来た。私は彼と向き合った。彼がキリスト者であることを知ったのは、しばらく後のことである。彼自身も、ここが教会と関わりのある場所だと

は知らずに来ていた。

私は、彼にこう伝えた。

「大変でしたね。私は、あなたを神の兄弟だと思っています。何でも相談してください。ここで、待っています」

何度か教会に誘ったが、「もう、教会に行く立場ではありません」と彼は断った。それでも私は誘い続けた。やがて、彼は20年以上ぶりに、教会の扉をくぐった。そのとき彼の内側に、言葉にならない声が響いたという。

『お帰り、B男。私は、あなたをずっと待っていたよ。よく帰ってきた。』

その声は、裁きでも、条件付きの受容でもなかった。崩れ落ちんばかりの、そのままの存在を、迎え入れる声であった。彼は自らを「放蕩息子」と重ねながら、イエスが自分を迎え入れてくれた気がした、と語った。

その後、彼は仕事を得た。教会では、誰に頼まれるでもなく、率先して礼拝後の片づけをする存在になった。週2回の休みには、デイサービスのボランティアを買って出た。その姿に、多くの人が頭を下げた。彼は「支えられる存在」である以前に、すでに「支える存在」として生き始めていたのである。

しかし、彼の歩みは決して平坦ではなかった。外国籍で触法者である彼は、幾度もアパートの入居を断られた。私たちは法人で契約し、私は保証人となった。家電を一つも持っていなかった彼のために、私は教会のみなさんに献金を募った。専門職として、一人の人間として、そして、あの「ガリラヤのイエス」を思い起こすからだ。

聖書の言葉が、今も私の魂に響いている。

「(私は) あなたがたを捨てて 決して孤児にはしません」(ヨハネ福音書)。

この経験を通して、私は大切なことに気づ

かされる。私たちはB男さんを「支えている側」だと思っていた。しかし実際には、社会の周縁に置かれ続けてきた彼の存在によって、私たち自身が「ガリラヤのイエス」へと導かれていたのである。

当事者とは、単にケアを受けるだけの救済の対象者ではない。憐れみの存在でも、社会の迷惑でも、お荷物でも、厄介者でもない。当事者とは、かけがえのない『仲間』である。人を貨幣や能力で測る市場原理主義の世界観から、私たちを解き放ち、「福音とは何か」「神の国とはどこに現れるのか」を、身をもって導いてくれる存在である。まさに当事者とは、イエスの命へ誘う、欠くことのできない宣教の担い手で、「導き手」そのものである²⁶。

社会の周縁に立つB男さんの関わりによって、私はこれまで理解できなかった「ガリラヤのイエス」と実存的に出会った。それは「メタノイア / μετάνοια」、すなわち視座が移される経験であった。

イエスは、社会から小さくされた人々に向き合い、全人的なケアを積み重ねた。もっと影響をもつ人に関わったほうが効率的だったかもしれない。しかしイエスは、周縁に置かれていた一人ひとりへの小さな関わりを選び続けた。その積み重ねこそが神の国の働きであり、最も深い意味でのソーシャルアクションであった。

この惨憺たる世界は、神が不在なのではない。また、個人が弱いから崩れるのではない。すでに周縁におかれた存在者の傍らに立ち、共に苦しみ、共に担うイエスの在り方から、私たちが学ぼうとしてこなかったことに、その根源的な要因があるのではないだろうか。人は「土から創られた」(創世記1章)存在で、もともと脆い。その脆さを否定しないで、むしろそのまま、イエスの懐に居場所を見出すこと、そこからすべては始まる。

IV-2. ガリラヤに立つ、当事者から始まる神の国

イエスは、生きることに困難を抱える人、生きづらさにある人を深く顧みた。病や障碍、貧困など、社会の中で脆弱性が露わになった当事者に対して、聖書は記す。

「イエスは深く憐れんだ」。

そして、専門職である私たちもまた、例外なく何らかの「当事者」として生きている。病や老い、孤独や不安、失敗や断絶、不正義への怒りや尊厳を傷つけられた経験、それらは、他者の痛みに気づく感受性となり、容易に立ち去らない踏みとどまる力となり、共に流す涙となる^{xv}。これらは消えることなく、私たちの存在に刻まれ、「受肉した経験」として生き続けている。この総体こそが、専門職として他者に同伴する最も深い基盤であると思わされる。

この当事者性を携えた一人の人間が、もう一人の当事者という人間に向き合うその場において、「with(共にある)」という関係が生まれる。そのただ中に、同じ傷を抱えた仲介者としてのイエスが立ち現れる^{xv}。イエスは、人と人との「間」に立ち、人と神との関係を贖う存在として、今も生きて働いている。

F. P. バイステックは記している。

「いかなる人も、人間すべてに普遍的に共通する価値をもっている。この普遍的に共通する価値は、創造主である神がわれわれに与えたものである。したがってこの価値は、ある人が身体に障害をもっていたり、経済的に失墜したり、さらに社会的に失敗したりしたとしても、公的扶助を申請する者でも、捨て子でも、また街の居酒屋の裏口に寝そべるアルコール依存症者でも、あるいは精神病院で暴れる患者であっても、人間としての尊厳と価値をもっている。たとえ、社会的な落伍者であっても、神の形になぞらえて創られた同じ人間である。また、天にましますわれらの

父から永遠の愛を受けた申し子であり、天国を受け継ぐものである。」^{xvi}

バイステックが示している人間観は、ソーシャルワークの根幹をなすものであり、イエスの在り方と深く重なっている。その意味において、イエスは究極的なソーシャルワーカーであったと言える。

今後、AI（人工知能）が進化し、問題解決はより敏速に合理的になるだろう。しかし、問題のただ中で「共に生き、共に耐える」ことの価値観は、失われていく危険がある。

だからこそ私たちは、単に制度を運用し、サービスを提供するためだけに存在していない。私たちが向き合っているのは、イエスにある個別の「他者の人生」そのものである。

私たちは、問題を解決する側に立つ存在ではなく、同じ不安と脆さ、同じ限界を抱えた当事者ゆえに、もう一人の当事者の隣に立ち続ける。その関係の「間」において、諸学に開かれつつ、キリスト教固有の「キリストにある福祉」は現実的な力をもって証されていく。

イエスは今も、当事者と共にガリラヤに立っておられる。そして私たちを、そこへと招き続けている。その招きに応じて、自らのガリラヤに立ち続けるところに、本当の意味での「神の国」は、すでに始まっているのである。

(中原キリスト教会

NPO 法人ホッとスペース中原)

注

- i) ヨハネの手紙一 4 章 16 節
- ii) 45.7%が孤独・孤立の状態。令和6年「人々のつながりに関する基礎調査報告書」内閣府孤独・孤立対策推進室より
- iii) 1983年、イギリスの研究者であるマイケル・オリバー (Michael Oliver) が、著書『Social Work with Disabled People (障害者とともに

- 歩むソーシャルワーク)』の中で新たな概念として社会モデルを提唱。個人の困難がその人の特性ではなく、むしろ社会的な障壁や構造によって作り出されていることを根拠としている。この考えは「障害者差別解消法」の根底にあり、合理的配慮の提供を社会の責務としている。
- iv) 米国の Institute for the Future のボブ・ヨハンセン氏が提唱している。
- v) 「イエスという男」第二版 増補改訂, 田川建三著, 作品社より
- vi) 全人的とは、当事者を病気や障碍、困難といった一つの側面だけでは見ない。その人を、身体的・心理的・社会的・文化的、そしてスピリチュアル(生きる意味や尊厳, 超越者との関係)な側面を含めた「全体的な人間」として捉え、理解し、関わること。
- vii) 日本聖書協会刊行『新共同訳聖書』
- viii) 「カウンセリングと心理療法」カール・ロジャース著, 岩崎学術出版社
- ix) 神学的には「位格的結合 (Hypostatic Union)」という概念である。
- x) 「生涯教育論」波多野完治著, 小学館 1972 年
- xi) 回収されなかった人生とは、出来事が意味として見出せない、理解と納得ができない状態。
- xii) 訂正的情緒経験とは、過去のトラウマ的あるいは否定的な対人関係の経験を、安全で肯定的な関係の中で再経験し、その感情を修正することを指す。
- xiii) 「いのちに向かって共に一変化する世界情勢における宣教と伝道のありかた」(世界教会協議会世界宣教伝道委員会・信仰職制委員会編 キリスト新聞社)
- xiv) 「コンパッション」(ヘンリー・J・M・ノーエン他, 石井健吾訳, 女子パウロ会, はじめに参照)
- xv) ヨハネの手紙一 4 章 12 節
- xvi) F. P. バイステック (尾崎新 他訳) 『ケースワークの原則』誠信書房 2006 年 114・115 頁